

紅茶の時間

止 廢 印 檢

昭和二十九年七月十日印刷
昭和二十九年七月十五日發行

紅茶の時間

定価 一二〇円

著 者 永井 龍男なが いりゅう おさむ

発行者 松本 國雄まつもと くにお

印刷者 荏原 十郎しんげん じゅうろう

東京都中央区築地一の一四

東京都中央区新富町二丁目二番地

発 兌 株式 会社 四季 社

電話築地(55)二六三四
振替東京二〇一九三

(落丁乱丁等の場合は本社
にてお取替いたします。)

交通印刷株式会社・新栄社製本

紅 茶 の 時 間

永 井 龍 男

四 季 社 版

目次

I

女房教育・・・・・・・・・・・・・・・・二

1 日記の第一頁・・・・・・・・三

2 安全な生活・・・・・・・・一四

3 二月の会話・・・・・・・・一五

4 座敷ぼうき・・・・・・・・一六

5 ものさし・・・・・・・・一七

6 小猫・・・・・・・・一八

7 彼岸・・・・・・・・一九

8 笑うラジオ・・・・・・・・二〇

9 摘み草・・・・・・・・二二

10 約束・・・・・・・・二三

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
たべもの	新薬	夫婦	サービス	牛乳流行	時計	釘	梅雨	ヒジの手入れ	ゆかた	誘導訪問	親切	効能書	チューブのふた	結婚記念日	下着
六	七	六	五	四	三	三	三	三〇	元	六	七	六	五	四	三

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27
新知恵の輪	バター	寝巻のひも	カレンダー	欲しいもの	買物籠	落葉	夜寒	番茶	官公吏の数	ペット報告	かけツ放し	アクセサリ	誘惑	のぞき見	ハンケチ
五	五	五	五	五〇	四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九

3	主婦の気転と労力	七
4	釘	五
5	ござ	六
6	足袋	七
7	黒	六
8	靴	九
9	肘	九
10	紙	〇
11	ブラシ	一
12	ズボン	一
13	秘訣	一

目

「母の日」の翌日	五
----------	---

いちぢごつこ	六
--------	---

競輪空想	九
------	---

ちかごろの娘達……………九四

二階堂の二階……………九七

1 梅雨去る……………九七

2 襦袢を縫わず……………一〇〇

IV

文章入門……………一〇五

1 頭の中……………一〇七

2 日記……………一〇九

3 神経……………一一一

4 葉書……………一二三

5 素直……………一二四

6 古典……………一二六

7 独り合点……………一二七

8 俳句……………一二九

9 余談……………一三一

10	影響	一三
11	翻訳された文章	一四
12	会話	一六
13	戦後派の文章	一八
14	ゆがんだもの	二〇
15	クリスマスに近く	二三
	表現のよろこび	二四
	教科書批判	二七
1	ある父親の立場から	二七
2	不用意と不自然	二九

V

	阿呆らしき俳句	一四三
1	第一の疑問	一四五
2	第二の無邪気さ	一四九

3	根源俳句	その他	………	一五三
	今日の俳句	………	………	一五六

装幀・挿画

横山 泰三

I
女房教育



日記の第一頁

女房という者は、編み物をしている時が、一番危険な状態に置かれた時だ。……と、会社の部長が、昨日の昼休みに冗談めかして言っていた。

脇で聞いていて、それが妙にピンと胸にきた。

君は昨夜もセッセと編み物をしていたし、僕を送り出して、家の中を片付けてしまうと、いまごろもたぶん、手まめに編み棒を運ばせていることだろう。

部長の不用意な言葉は、いろいろに取れる。女房の考えごとに、恐怖を感じる、脛に傷を持つ亭主もあろうし、長い間積りに積つた女としての不平が、そんな時にハッキリ形をなしてくるかも知れない。男にとつては、それも怖いさ。

だが、僕にピンときたのは、そんなことではない。この頃ひそかに僕の感じている倦怠を、シンと編み物をしている君も、感じ出しているのではあるまいかと、その時思い当つたからだ。どこの夫婦も通る道なのだろう。切り抜けられないことはあるまい。

安全な生活

夕方カバンを上り口に置いてクツを脱ぐ処から、君との生活が始まり、翌朝クツをはく処で、君との生活が一時中断される。

こうして六年経つた。

その六年の間に、僕らはいつの間にか、安全な生活を願う習性を身につけた。どちらからというのではなく、お互いが知らず知らずに、安全第一主義を取るようになっていく。

安全な生活とはなんだろう。果して安全な生活などがあるものだろうか？ われわれの生活にはコケがつきやすい。コケを拭き取るだけにも、ことのほか勇気が要るが、僕らはまだ若いのだ。

昨日は北風が強かったが素晴らしい快晴だった。オーバーを着こんで、社の屋上へ上ると、富士がよく見えた。オーバーのポケットに手を突っ込むと、タバコの粉や毛屑がたまっている。

富士をながめながら、それをはたきはたきそんなことを考えていた。安全な生活よりも、お互いに張りのある毎日を、まず作り出したいものだ。

二月の会話

二月という月は、一刻も早く行つてしまふ方がいいといふので、みんなで二十八日に定めたのかも知れないね。寒いし、不景氣だし、風邪は流行るし。「塩ざけの切身は、二つに切つて焼いた方がいいね」と、僕が提案した時「あら、急に世帯染みたことを……」と、君はこともなげに笑つた。僕の氣持の説明無しなのだから無理はないが、実はそんな細かい点から、家の中の氣分を変えて行くつもりになつたのだ。

君にいわせれば、炊事の手を省くつもりかも知れないが、昨日の食べ残しの塩ざけを、今朝また食卓に出すような食事の仕方に、われわれのゆるみの來た生活が、むざんに象徴されてゐるような氣がする。

塩ざけは、半切れあれば一食に足りる。

齒のかけた、古櫛みたいな食べ残しの塩ざけは、君の眼にもたのしくはあるまい。財布の問題じゃあないのだ。